

富山県における農薬中毒実態調査（1993年）

富山県農村医学研究会

寺 中 正 昭, 大 浦 栄 次, 石 田 礼 二
渡 辺 正 男, 越 山 健 二

は じ め に

富山県農村医学研究会では、昭和60年から農薬中毒臨床例の収集を行っている。第1回目の昭和60年の調査では、昭和55年から60年までの臨床例を一括して収集し、その後は毎年、前期、後期の2回調査を行っている。

ここでは、平成5年の結果について報告する。

方 法

調査対象医療機関は、県内全ての内科、外科、小児科、眼科、皮膚科を標榜する約650カ所であり、一次調査として往復葉書で、臨床例の有無と件数を問い、症例「有り」と回答があった医療機関に詳細調査用紙を送付し、症例の収集を行ってきた。

平成5年の一次調査の回収状況は、表1の通りである。

結 果 と 考 察

一次調査の回収率は、昨年と略同率の68.2%であった。以下に詳細報告された9例について、その概況について報告する。

ケース1

性・年齢：男，40才

原 因：散布中

農 薬 名：エルサンバッサ（BPMC，PAP）

状 況：8月8日，9日稲に葉イモチ対策

表1 回答状況（1993年・前期）

診療科	回答数／依頼数	回答率
内 科	270／387	69.8
外 科	64／103	62.1
小児科	56／79	70.9
眼 科	37／58	63.8
皮膚科	21／30	70.0
計	448／657	68.2

回答状況（1993年・後期）

診療科	回答数／依頼数	回答率
内 科	263／388	67.8
外 科	66／103	64.1
小児科	64／79	81.0
眼 科	42／58	72.4
皮膚科	23／30	76.7
計	453／658	69.6

の農薬散布後、倦怠感強く現れる。

症 状 等：9日後受診。倦怠感のみで、その他特に異常なし。薬剤散布の影響が考えられたので、ケベラS、アギフトールSを静注。治癒

ケース2

性・年齢：女，70才

原 因：散布中

農 薬 名：土壌消毒のための石灰（石灰）

状 況：石灰を散布しようとして、手から袋がすべり落ち、袋の口から石灰

が飛び出て、顔面にかかった。
症 状 等：左眼痛強く、角膜、球結膜、瞼結膜に浮腫著明。治療により改善。

ケース 3
性・年齢：男，73才
原 因：散布中
農 薬 名：ヒノラブバイバリダ（MPP，バリ
 ダマイシン，フラサイド，EDDP）
状 況：薄手ズボンを着用して，8月24日，
 稲に約1時間散布
症 状 等：両大腿に火傷様アレルギー性皮膚
 炎症，掻痒感（+），発赤（3+），
 丘疹（+），チオラ50mg・2T，ダ
 レン2mg・2C，当帰飲子5.0g分2，
 5日分内服，ユーメトククリーム
 10g，オイラックス20g外用。約1
 ヶ月後治癒。

ケース 4
性・年齢：女，44才
農 薬 名：プリグロックスL
 （バラコート剤）
状 況：3月6日，午後8時，夫と喧嘩し，
 プリグロックスLをスプーンに2
 〜3杯飲む。
症 状 等：3月7日，午前1時入院，腹痛，
 下痢，咽頭痛。血小板の低下著明
 （5.8万），嚥下14時間後より，DH
 P開始，毎回6時間，6日間連続
 実施。入院後6日眼まで血中バラ
 コート測定するもいずれも陰性。
 6日目に血小板10万を越える。28
 日目，治癒退院。

ケース 5
性・年齢：男，55才
原 因：自殺
農 薬 名：グラモキソン（バラコート剤）
状 況：行方不明になっていた者が，家の

物置で発見される。期日不明。

ケース 6
性・年齢：男，20才
原 因：自殺
農 薬 名：スミチオン（MEP）
状 況：6月3日嚥下。2週間前，不眠を
 理由に精神科を受診していた。
症 状 等：発見時，嘔気，嘔吐，腹痛。コリ
 ンエステラーゼ，0.13。血中農薬
 濃度検出限界以下。胃洗浄のみ実
 施。2日後治癒。

ケース 7
性・年齢：男，40才
原 因：自殺
農 薬 名：スミチオン（MEP）
状 況：10月3日，嚥下。
治療状況：頻脈，瞳孔散大，口渴，発汗，興
 奮，幻覚症状あり。硫酸アトロピ
 ン，PAM併用。一週間後治癒。

ケース 8
性・年齢：男，2才
原 因：誤飲
農 薬 名：ダイアジノン，DDVP
状 況：6月15日，町から配られた農薬を
 誤飲
症 状 等：胃洗浄1,500l，ラシックスで注圧，
 縮瞳は認められなかったが，血圧
 50/30，カタボンにて昇圧，コリ
 ンエステラーゼは0.8程度で，特に
 低下は認められず。3日後治癒。

ケース 9
性・年齢：女，81才
原 因：誤飲
農 薬 名：（バラコート剤）
状 況：5月21日11時誤飲，すぐに吐き出
 す。

主 状 等：22時間後来院。腹痛，下痢，口腔
内疼痛，直ぐに総合病院に転院
(以後不明)

今回収集された症例のうち，散布中3例，
自殺4例，誤飲2例，計9例であった。

原因農薬は，自殺4例中2例，誤飲2例中
1例，計3例がパラコート剤であった。これ
までの調査で，パラコート剤が半数前後であ
ったが，現在減少傾向にある。これは，グラ
モキソンからブリグロックスLに変更になり，
パラコート濃度が24%から5%に下げられ
たことが，大きな要因となっていると考えら
れる。

ケース4は，少量のパラコート剤の服用で

あったが，これまでの経験から徹底した治療
がほどこされ，救命した例である。以前に収
集した事例の中に，わずか1～2mlの服用で，
徹底治療を受けるまで3週間以上かかり，結
局1ヶ月後に死亡した事例があった。パラコ
ート剤の治療においては服用量がどのように少
量でも，今回の事例のごとく徹底治療をすぐ
に開始すべきである。

散布中の事例では，防護状況を調査してい
ないが，いずれにしても，マスク等の基本的
防護はすべきである。

誤飲例は，これまでの報告と同様，2才と
81才の幼児と高齢者において発生している。
誤飲を防ぐには，弱者の周囲にいる者の農薬
管理の意識の徹底が必要と考えられる。